

令和6年度 文化庁

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」

報 告 書

令和7年3月

公益社団法人日本写真家協会

1 はじめに

本年は昨年と違い比較的穏やかな幕開けとなり、心新たに新年のスタートをきれた方も多いのではないだろうか。しかし未だ思うように進まぬ震災の復興や不安定な国際情勢は心休まる状態になったとは言えない状況も続いている。一方で、ますます増加するインバウンドなどの影響もあり、社会全体の活気を感じる空気はカメラ業界もその恩恵を受け好調なように感じられる。その勢いは写真業界にも波及している。日本写真家協会（以下 JPS）の活動も昨年以上に活発化し、その変化を実感されている方も多いただろう。

そんな活性化する JPS の活動の中で日本写真保存センターの仕事も着実に進める事ができている。写真原板の収集、整理、保存の重要性を社会にアピールするために、シンポジウム参加やセミナー開催など様々なイベントを通して多くの人々にその意義を感じて頂けるよう努力を続けている。本年度は、日本を代表する世界的山岳写真家である白川義員氏の原板約 18,000 点を収集することができた。また、本年度の国立映画アーカイブ相模原分館への入庫数は昨年度実績から約 2 倍に増加し、約 21,700 点となった。これまでに入庫した総点数は 193,000 点を超え、着実にその活動を進められている。

デジタル化方法の精査など保存、活用法も時代に合わせてフレキシブルな対応ができるよう日々努力を重ねており、写真保存センターの役割の重要性を実感しながら活動を続けている。

最後に、改めてこれまで保存センターが培った写真原板の整理や保存の仕組みに加え、公開を通して様々な機関と連携することで調査研究が円滑に進むようにして、写真原板のアーカイブにおいて保存センターが中心的役割を果たして行くよう環境整備を進めていくことを記しておく。

熊切 大輔（公益社団法人日本写真家協会会長）

目 次

1	はじめに	3
2	本調査の概要	6
2.1	調査研究の目的	6
2.2	調査研究の趣旨	6
2.3	調査研究の内容	6
3	本年度の調査研究の実施概要	8
3.1	題目	8
3.2	実施期間	8
3.3	調査研究の内容	8
3.4	中期計画の検討	9
4	業務実施体制と実施内容	11
4.1	調査研究にあたる諮問・調査委員、補助員、調査員名簿	11
4.2	課題項目別実施内容	12
5	本年度収集・調査した写真原板について	13
5.1	本年度の写真原板の受入数及び保存庫入庫数	13
5.2	本年度収集・調査した写真原板 総論	14
5.3	本年度調査した写真原板 詳細	17
6	本年度のトピックス	18
6.1	シンポジウム「写真文化の継承と資料・記録の保存活用」	18
6.2	JPCA 教育利用写真アーカイブとの連携	20
6.3	マウントされた写真原板の包材入替と画像デジタル化	20

7	情報発信と利活用	23
7.1	本年度の情報発信と利活用 総括	23
7.2	ウェブサイト	23
7.3	写真原板データベース（閲覧DB）	24
7.4	ジャパンサーチとの連携	24
7.5	セミナー	25
7.6	画像貸出し等の利活用	28
8	支援組織	30
8.1	支援組織設立の経緯と支援組織会員	30
8.2	支援組織の沿革	31
8.3	支援組織の支援内容について	31
8.4	今後の支援体制と保存センターの活動について	31
9	まとめ	33

2 本調査の概要

2.1 調査研究の目的

わが国の時代を色濃く記録した歴史的あるいは社会的、芸術的に貴重な写真原板（フィルム及び乾板等）は、プリントと同様に時を経て価値をもった写真として評価される。しかし、これらは年月の経過とともに劣化、散逸、廃棄の危機に直面している。そのため、その写真原板の収集、調査を行い、後世に残していくための保存管理を図る。また、アーカイブ化して公開し、写真文化の振興と発展に役立てると同時に、社会・文化の研究や学術、教育、マスメディア等における利用促進を図り、もって国民文化の向上に寄与することを目的とする。

2.2 調査研究の趣旨

日本の近現代が記録された写真には、今では見られない文化財や建物・風景、歴史的出来事や災害、また日本人の暮らしや日常、地域文化などの貴重な映像が残されている。そのため、時間的経過による写真原板の劣化が進んでいる 1945 年から 1970 年代の写真原板を重点的に収集することを基本方針とする。また、この時期の前後であっても撮影者の物故などによって散逸・廃棄の危機に直面した価値ある原板は積極的に収集を図る。

収集した写真原板は、インターネット上で閲覧できるようにするため、画像のデジタルデータ化を行うと共にデータベースに撮影者、撮影日時、撮影場所などの情報を記録する。原板自体は長期保存に適した包材に入れ替えて、最終的には国立映画アーカイブ相模原分館で保存する。

また、画像の利用については、様々な分野や用途に対応できる画像データを作成・保管するための研究を進めるとともにデータベースの利便性向上を図っていく。

2.3 調査研究の内容

① 諮問委員会の設置

調査研究を行うにあたり、写真史、フィルム保存技術、著作権権利処理、利活用、デジタルアーカイブに関わる専門家による諮問委員会を設置し、具体的な活動方針を図るための意見聴取を行う。

② 写真原板の収集

日本写真家協会に設置した写真保存センター委員会により、収集する写真原板の選定や所有者との交渉を行う。

収集する写真原板は、撮影者、撮影日時、撮影場所などのメタデータが明確になっている写真集や雑誌、新聞等の出版物および写真展などで発表された作品を中心とする。

③ 権利処理

所有者との権利処理は、日本写真保存センターへ著作権が譲渡される「寄贈」契約を原則としているが、状況によっては著作権が撮影者や所有者側に維持される「寄託」契約を容認する。

④ 写真原板の調査と目録の作成

収集した写真原板の情報管理を行うためのデータベースを構築する。

データベースは管理者用のデータベース（管理データベース）と一般者向け写真原板データベース（閲覧データベース）に分けられる。管理データベースには、写真原板自体の劣化状態や画像点数、撮影者、撮影時期、撮影場所、使用された出版物などの情報を記録し目録を作成する。また、写真原板の画像のデジタルデータ化を行い、閲覧データベースにて一般の方が閲覧できるようにする。画像公開にあたっては、著作権等の権利処理を行い、被写体の肖像権や所有権などの権利についても研究を進め、公正な公開基準の指針を構築する。

⑤写真原板の保存方法

写真原板の劣化状態を検査紙で確認したうえで、長期保存に適した中性紙の包材に入替え、フィルム¹の保存環境が整っている国立映画アーカイブ相模原分館のフィルム保管庫（125 m²×4部屋の合計 500 m²、室温 10℃、湿度 40%RH）で保存する。

⑥写真原板の利活用

日本写真保存センターの活動内容を公開しているウェブサイトと、調査した原板の情報を公開している写真原板データベース（閲覧データベース）の認知度を上げていくための活動を行う。その一つとして、様々な資料を収集・公開している他の機関との連携を進め、保存センターが保有する写真を紹介する機会を増やしていく。また、より多くの写真家や分野の写真を見ることができるよう、閲覧データベースで公開する画像点数の増加を図ると共に、検索や閲覧システムの改良を進め、データベース利用者の利便性の向上を進めていく。画像データの利用貸出しにも積極的に取り組み、利用者の用途に合った画像データの作成とデータ保存方法について、作業方法の確立を進める。

3 本年度の調査研究の実施概要

3.1 題目

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」
（「写真フィルムの収集保存・活用に関する調査研究」を含む）

3.2 実施期間

令和6年4月契約締結日から令和7年3月31日まで

3.3 調査研究の内容

(1) 写真原板の収集

本年度も、原板の収集と調査・保存作業のバランスを取りながらの活動となった。昨年度より訪問調査を開始していた白川義員氏の原板収集を前半期に行うこととなり、後半期に複数名の写真家のご遺族の元へ伺い収集に向けた調査を実施する形となった。

新たに収集調査の対象とした写真家は3名で、このうち1名の写真家から原板の収集を行った。このほかに1団体から原板の収集を行った。写真家では、日本の山岳写真の第一人者でもある白川義員氏のご遺族より寄贈申し入れがあった。また、広島平和記念資料館からも昨年度に引き続き追加での原板保存の依頼を受けた。

(2) 写真原板の調査状況

写真原板の調査は、写真原板や資料を受取った時の整理状態や数量など全体を記録する「初期調査」と、その後に原板一本ずつの詳細な状態や公開するコマの撮影日時・場所などを記録する「本調査」の2つがある。本年度調査を行った内容は以下の通りである。

○初期調査：大東元、勝山泰佑、広島平和記念資料館

○本調査：杉村恒、打田浩一、岡村崔、広島平和記念資料館

本調査が完了した写真原板は、国立映画アーカイブ相模原分館に入庫を行った。

(3) 写真原板のデジタル化

高画素のデジタルカメラを使用した複写方式の写真原板のデジタル化に変更して以来、効率化を進め、本年度のデジタル化数は過去の低画質スキャン画像の再撮影も含め18,594点となった。原板の調査作業と高精細デジタル化は、撮影時の採番方法やマウントされた原板の処理方法を再検討して効率化をはかった。これにより、国立映画アーカイブ相模原分館への原板の年間入庫数、デジタル化した原板数はいずれも昨年度より増加した。

撮影者が現場でとった行動や時系列での状況を掴むことができる画像全コマのコンタクトシート加工は省略しつつ、採番方法を工夫するなどして必要時にPC画面上で再現できるようにし、従前の時系列分析や作家研究における制作過程の調査に役立つように努めた。PC画面上でのコンタクトシート再現は出版物掲載画像の特定にも活用されている。

(4) データベースの改修

本年度は、オペレーティングシステム（Windows10）のサポート終了に備え、アップデート作業

を行いサポート切れによる脆弱性への事前対応をとった。

(5) 写真原板の利活用と広報活動

調査や権利処理が完了したコマの画像や原板情報（メタデータ）は、順次閲覧データベース（写真原板データベース）にて公開し、ジャパンサーチとの連携を進めている。

本年度は閲覧データベースで525点を追加公開し、累計の公開数は24,454点となった。また、低画質画像データの再撮影を含め高精細画像を増やすことは「JPCA 教育利用写真アーカイブ」（6.2項参照）への活用にも活かされている。

写真原板の利活用の状況を把握する指標の一つとして、データベースの閲覧数を調査している。閲覧数の詳細は、「7 情報発信と利活用」に記載しているが、pv数は昨年比121%と増加した。閲覧データベースの更新を前半期に進めたことによるものと考えられる。保存センターのウェブサイト自体についても改訂を進めており、次年度以降のアクセス増加を期待したい。

画像データ利用に関しては、出版物への掲載やイベント・写真展での展示、テレビ番組での放送など、2025年1月末時点で24件となった。

対外広報活動については、日本写真保存センター主催のセミナーを2回開催したが、セミナー聴講をきっかけに他のアーカイブ機関から保存センター見学の希望が来るなど、写真界以外からも関心が寄せられていることが示された。

3.4 中期計画の検討

(1) 収集する原板数と調査・保存作業の検討

撮影媒体がフィルムからデジタルへ移行して久しいが、フィルムで撮影されていた写真家の高齢化や物故に伴い、ご本人やご遺族から所有している写真フィルムの保存や処分についてご相談を受けることも多い。その原板全てを受入れたいが、今後収集すべき写真家のリストアップや、収集する原板数のシミュレーションを行った結果、現体制（人員・スペース）では対応が難しい。こうした課題に対する取り組みとして、中期的な施策の検討を行った。その骨子は以下の通り。

- ・一人の写真家に対しても、詳細な調査を行って相模原分館に入庫する原板と、包材入替やDB登録を行わずにそのまま冷所保管する原板に予め仕分けして収集することを検討する。
- ・収集した原板のうち、当面はそのまま冷所保管する原板の保管場所とその費用捻出を検討する（相模原分館の空き室の活用、他のアーカイブ機関との連携、民間倉庫の利用拡大など）。
- ・日本写真保存センターでの原板調査や保存作業が円滑に進むよう、また写真家個人においてもご自身で適切な原板保存ができるよう、写真家および遺族に推奨する写真原板の整理方法や保存方法をセミナー等で啓蒙する。
- ・原板保存の分散や他機関と連携した利活用の促進を図るため、他のアーカイブ機関の参考になる写真原板アーカイブ方法のガイドラインを作成する。
- ・教育現場での利活用を推進するため、日本写真著作権協会が運営する「JPCA 教育利用写真アーカイブ」へのデータ登録を計画的に進める。

(2) 収集した原板による写真展開催の検討

被爆から80年の節目となる2025年に、写真原板の保存意義と原爆写真による被爆の記録継承をテーマにした写真展の開催を計画し、会場の選定、講演会の企画を進めた。

寺師 太郎（公益社団法人日本写真家協会理事）

4 業務実施体制と実施内容

4.1 調査研究にあたる諮問・調査委員、補助員、調査員名簿

事業実施組織

公益社団法人日本写真家協会

統括部門

代表	熊切 大輔 (公益社団法人日本写真家協会会長)
	高村 達 (公益社団法人日本写真家協会副会長)
	山口 規子 (公益社団法人日本写真家協会副会長)
	小池 良幸 (公益社団法人日本写真家協会専務)
	島田 聡 (公益社団法人日本写真家協会常務)
	伏見 行介 (公益社団法人日本写真家協会常務)
	寺師 太郎 (公益社団法人日本写真家協会理事)
	棚井 文雄 (一般社団法人日本写真著作権協会常務理事)

諮問・調査部門

諮問委員会

委員	北村 行夫 (虎ノ門総合法律事務所 弁護士)
委員	白山 眞理 (写真史研究者)
委員	大亀 哲郎 (日本ユニ著作権センター 企画室主任研究員)
委員	高橋 則英 (日本大学上席研究員・日本大学大学院芸術学研究科 講師)
委員	多田 亞生 (株式会社クレヴィス 顧問)
委員	谷 昭佳 (東京大学史料編纂所史料保存技術室 技術専門員)
委員	田良島 哲 (東京文化財研究所 客員研究員)
委員	鳥原 学 (写真評論家)
委員	丹羽 晴美 (東京都写真美術館 事業企画課長・学芸員)
委員	丸川 雄三 (国立民族学博物館人類基礎理論研究部 教授)
委員	山口 孝子 (東京都写真美術館 保存科学専門員)
委員	吉野 弘章 (東京工芸大学学長)

補助員	井上 六郎 (公益社団法人日本写真家協会会員)
補助員	内堀 タケシ (公益社団法人日本写真家協会会員)
補助員	佐藤 倫子 (公益社団法人日本写真家協会会員)
補助員	竹田 武史 (公益社団法人日本写真家協会会員)
補助員	野田 知明 (公益社団法人日本写真家協会会員)
補助員	西村 広 (公益社団法人日本写真家協会会員)

調査作業部門

センター長 山下 博

調査員 笹木 諭

調査員 幸田 沙也子

調査員 中辻 利枝子

4.2 課題項目別実施内容

実施月	事項	概要	詳細
4月	会議	写真保存センター委員会	ウェブサイトリニューアルの骨子検討
	会議	諮問委員会①	令和5年度事業報告・令和6年度年間計画
	会議	支援組織会議①	令和5年度事業報告・令和6年度年間計画
5月	会議	写真保存センター委員会	次年度写真展の骨子検討
6月	保存	写真原板の収蔵①	国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫への収蔵
	会議	写真保存センター委員会	次年度写真展（原爆展）の開催場所、展示内容検討
	広報	情報発信・利活用	アート・ドキュメンテーション学会シンポジウムでの講演 次年度写真展の展示候補選定
7月	会議	写真保存センター委員会	ウェブサイト改訂方針変更と部分改訂の実施
8月	会議	写真保存センター委員会	マウントされた原板の包材入替と画像デジタル化検討
9月	会議	写真保存センター委員会	第1回セミナー開催準備
	広報	情報発信・利活用	寄附返礼品の検討 ウェブサイト一部改訂
	収集	写真原板の収集	白川義員の写真原板を収集
10月	広報	情報発信・利活用	第1回セミナー開催
	保存	写真原板の収蔵②	国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫への収蔵
	会議	諮問委員会②	令和6年度上半期報告・下半期の計画
	会議	支援組織会議②	令和6年度上半期報告・下半期の計画
11月	会議	写真保存センター委員会	写真家ごとの処理方針の見直し 写真原板アーカイブのガイドライン検討
12月	会議	写真保存センター委員会	次年度写真展の予算検討
1月	会議	写真保存センター委員会	次年度写真展の講演会内容および会場検討 中期計画の検討
	広報	情報発信・利活用	ウェブサイト追加改訂
2月	広報	情報発信・利活用	第2回セミナー開催 ジャパンサーチのギャラリー追加掲載
	会議	写真保存センター委員会	閲覧DBにおける画像公開基準の再検討
	保存	写真原板の収蔵③	国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫への収蔵
3月	報告	報告書作成	令和6年度事業報告書

山下 博（センター長）

5 本年度収集・調査した写真原板について

5.1 本年度の写真原板の受入数及び保存庫入庫数

5.1.1 受け入れた写真原板資料の概要

本年度は写真家1名と1団体から18,099点の写真原板資料を受け入れた。写真原板資料の概要は表1の通り。受入数は初期調査時の概数で記す。

表1 令和6年度写真原板資料受入概要

撮影者・団体名	受入日	受入数		概要
		初期調査未点数	初期調査済点数	
白川義員	2024年9月24日	18,098	—	山岳風景や聖地など
広島平和記念資料館	2025年1月21日	—	1	広島原爆被害の様子など
合計2名・団体		18,098	1	

5.1.2 保存庫へ入庫した写真原板の概要

本年度の国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫への写真原板の入庫作業は2024年6月20日、10月17日、2025年2月20日の3回行い、計21,711点を取めた。写真原板の入庫内容は表2の通り。

表2 令和6年度写真原板入庫内容 2025年2月末現在

撮影者名	入庫原板数
写真協会	17,962
若目田幸平	357
打田浩一	1,375
杉村恒	2,016
広島平和記念資料館	1
合計5名・団体	21,711

5.1.3 年度別各作業処理数

日本写真保存センターはこれまで91名・団体、377,672点の写真原板資料を受け入れた。そのうち国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫へ取めた写真原板は193,515点。年度別の各作業

処理数は表3の通り。調査中・未処理の写真原板は約110,000点。また、調査を開始してから現在までにデジタル化した写真原板の数は103,700点になった。今年度新たに高精細デジタル化した写真原板は15,705点となり、過去の低画質の物の再撮影も含めると18,594点となった。

表3 年度別各作業処理数（2025年2月末現在）

年度	写真原板受入数	相模原在庫数	デジタル化した写真原板数
平成21年度	28,712	—	4,775
平成22年度	25,626	—	1,369
平成23年度	41,203	—	6,988
平成24年度	4,470	8,901	2,208
平成25年度	3,523	15,139	2,560
平成26年度	40,258	24,179	4,038
平成27年度	61,523	7,210	5,062
平成28年度	11,000	5,263	4,372
平成29年度	91,551	9,229	3,969
平成30年度	343	12,608	2,739
令和元年度	24,229	8,501	2,782
令和2年度	12,240	21,247	11,154
令和3年度	2,459	18,244	13,782
令和4年度	541	29,462	13,135
令和5年度	11,895	11,821	9,062
令和6年度	18,099	21,711	15,705
合計	377,672	193,515	103,700

笹木 諭（調査員）

5.2 本年度収集・調査した写真原板 総論

5.2.1 白川義員（2022年87歳で逝去）

2023年の年の瀬、亡くなって1年ほどたった白川義員氏の事務所を訪ねた。新しくできたにもか

かわらずひと気のない高輪ゲートウェイ駅からほどなく、坂の途中にある事務所。まだ開発途上な駅前の様子これから始まる壮大なアーカイブを予兆させるようでもあった。総カーベット敷きの事務所に足を踏み入ると、80年代の重厚な趣の部屋には不釣り合いな小さな金庫の中に白川氏の原板は保管されていた。

白川氏と言えば名実ともに日本を代表する世界的山岳写真家で「アルプス」「ヒマラヤ」「アメリカ大陸」「新約聖書の世界」「旧約聖書の世界」「キリストの生涯」「聖書の世界」(新潮社版)「中国大陸」「神々の原風景」「仏教伝来」「南極大陸」「世界百名山」「世界百名瀑」「永遠の日本」など、その多くは大判の写真集として刊行するなど精力的な活動を続けられてきた。晩年に行われた東京都写真美術館での展示「永遠の日本/天地創造」は、これまで積み上げられた作品の数々のみならず、自身の作品を大胆にアレンジしたキービジュアルで新たな表現を世に問われていた。また、著作権保護でも大きな足跡を残している。1971年に白川氏がマッド・アマノ氏を提訴した、いわゆる「パロディ・モンタージュ写真事件」はその後の著作権法を語る上で度々参照される事案となった。このように写真界のみならず社会に大きな影響を与えた白川氏の原板を収蔵することは非常に重要なことと考える。

原板寄贈に関しては、過年度より白川氏代理人弁護士よりご遺族の意向を受け調整を進めていた。写真集14冊のカラー画像を対象に原板の確認を白川事務所で行ったが、カラーポジフィルムは写真集ごとに4x5フィルムの空箱に入れて整理されており、リスト化も済んでいたため現場での確認は順調に進んだ。その後、写真集に採用されなかった原板を含めた約2万点の原板と写真集を保存センターへ移送した。現在は24時間空調の屋内で保存し、整理を進める順番を待っている。

今回、主要写真集14冊に使用された原板約2万点を受領した。原板の現状は白川氏の手によって出版写真集別に分類がなされており、原板に振られたナンバーと枚数が記入されたフィルム箱に収納されていた。現在は受領した原板の状態の確認を行い、保存基準に適合するかを確認の上、寄贈契約を代理人弁護士と進めている。



金庫に保管された原板



白川事務所での原板確認



白川氏によって整理された原板



原板に振られた整理番号

寺師 太郎 (公益社団法人日本写真家協会理事)

5.3 本年度調査した写真原板 詳細

5.3.1 新規受け入れ

白川 義員（しらかわ よしかず） 1935（昭和10）年 -2022（令和4）年 愛媛県生まれ。

日本大学芸術学部写真学科卒業後、放送局勤務などを経て、フリーの写真家に。アルプス・ヒマラヤなどの山岳風景、聖書や仏教の世界を題材とする作品を発表。昭和56年、全米写真家協会最高写真家賞を日本人として初めて受賞した。「世界百名山」「世界百名瀑」など多くの作品集を出版した。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2024年9月24日にカラーポジフィルム 18,098 点を受け入れた。

○原板の内容

「アルプス」、「ヒマラヤ」、「アメリカ大陸」、「新約聖書の世界」、「旧約聖書の世界」、「キリストの生涯」、「聖書の世界」、「中国大陸」、「神々の原風景」、「仏教伝来」、「南極大陸」、「世界百名山」、「世界百名瀑」、「永遠の日本」の写真集に掲載された作品。

山下 博（センター長）

5.3.2 受入継続中の写真原板詳細

昨年度までに受け入れた写真家・団体のうち、本年度も引き続き受け入れを行った写真原板について記す。写真家・団体のプロフィールは前年度までの報告書にて記載済みのため、写真原板の特徴のみを記す。

広島平和記念資料館（ひろしまへいわきねんしりょうかん）

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2025年1月21日 135判モノクロネガ 1点 41 コマを受け入れた。

○原板の内容

撮影者は林重男。撮影時期は1945年10月1日から10日の間。撮影内容は広島原爆被害の様子。

○原板の状態

年代相応の経年劣化が起きている。

笛木 諭（調査員）

6 本年度のトピックス

6.1 シンポジウム「写真文化の継承と資料・記録の保存活用」

令和6年6月15日（土）東京都写真美術館1階ホールにて開催された、アート・ドキュメンテーション学会、第35回年次大会において開催されたシンポジウムにキースピーカとして、日本写真保存センター代表高村と担当理事寺師の2名が参加した。シンポジウムでは、一世紀半以上にわたって世界中で撮影されてきた写真の文化的、社会的価値が芸術作品や歴史資料として定まってきたにも関わらず、デジタル画像の発達と普及によって担い手の急速な世代交代が進んでおり、これまでの世代が築き上げた写真文化および乾板、フィルムなどの写真原板や写真の制作に関する写真関連資料の膨大な蓄積の継承に生じている課題について議論された。

高村代表の講演は、高村家に伝わる高村光雲、高村光太郎、高村智恵子、高村豊周の作品を親子2代で撮影した写真原板のデジタル化、原板自体の褪色の問題、デジタルデータを活用した展示用レプリカ製作、著作権保護期間終了後の作品の写真作品化による新たな権利獲得などについて語られた。

特に高村智恵子の紙絵作品に関する報告では、経年変化で褪色した状態にある作品に対し、作品の褪色が進む前に撮影された写真原板からデジタル化した画像をインクジェット用和紙に出力して作品を再現する事例が示された。この事例から、美術の世界においても、写真原板を保存する価値を示すことができた。また、美術品のアーカイブにおいては、一定間隔で作品の経年変化を写真撮影して記録する意義に加え、写真原板の劣化にも対応しながら作品を再現することが重要であり、写真家の世界ではデジタル化以前からマイグレーションの重要性が理解されていたことを美術館、博物館、大学、研究機関に広く訴求することができた。



高村代表のビデオメッセージ（撮影：三島大暉）

寺師の講演では、日本写真保存センターの創設からの理念と活動を示すなかで、廃棄されるような未整理な状況での収集の困難さ、保存における環境整備、整理におけるデータベース構築と構造化手法、国立映画アーカイブ相模原分館における保存、データベース公開と活用について個別の説明を行った。特に、原板保存に使用されていた包材を通気性が担保された素材に入れ替えるなど保存環境の整備が原板の長期保存において重要な点、データベース構築において、写真家を中心に分類しつつ、原板形態を加味した構造化とメタデータ項目の設定などの手法は他機関に大いに参考になるものと考えられる。また、現状の利活用状況としてインターネット上での「写真原板データベース」の公開と内閣府が主導し国立公文書館が運営する「ジャパンサーチ」との連携について述べ、公開による影響として画像データ貸出における利用者数の推移などを示しながら外部機関との連携の重要性を示した。しかしながら、現在の人員体制では収集数にアーカイブ処理数が追い付かない現状を他機関と共有した。



寺師担当理事の講演（撮影：三島大暉）



高村代表（スクリーン投影）も加わったディスカッション、左から、東京文化財研究所：田良島氏、東京工芸大学名誉教授：吉田氏、JPS：寺師、東京大学史料編纂所：桑田氏、井上氏（撮影：三島大暉）

6.2 JPCA 教育利用写真アーカイブとの連携

日本写真保存センターでは収集した原板の利活用の一環として、学術研究、出版、テレビなどに原板のデジタル画像データを貸し出しているが、その多くが歴史的出来事の記録であることから、利活用の場として日本写真著作権協会が運営する「JPCA 教育利用写真アーカイブ」への画像登録を積極的に進めることとした。「JPCA 教育利用写真アーカイブ」は学校など教育機関の授業で画像データの利用を促進するもので、作品の著作者、撮影年などが明示されているため、利用者にとっては安全安心に画像を利用することができ、撮影者にとってもその権利を明確にした状態で画像が利用されることになる。さらに日本写真保存センターの画像は、多くのメタデータが明示されており「写真原板データベース」を検索すれば、詳細なメタデータ（撮影場所や被写体情報など）や掲載書籍にたどり着くことができる。これは授業で画像を使用するにあたって、その写真が撮影された文脈を理解することにつながる。教育目的に限らず写真を利活用する際にはその文脈が重要であることから、「JPCA 教育利用写真アーカイブ」に日本写真保存センターが所蔵する写真原板のデータを登録することは、撮影者の意図を伝える一助になると考えられ、その意義は大きいといえる。本年度は約 200 件の画像を登録し、今後も日本写真保存センターでの貸し出し実績などを参考に、教育現場での利用が見込まれる画像を選定して順次登録を進めていきたい。

寺師 太郎（公益社団法人日本写真家協会理事）

6.3 マウントされた写真原板の包材入替と画像デジタル化

これまでマウントされた原板は、マウントを取り外さずに専用の小箱やストレージボックスに収納して相模原分館に入庫してきた（平成 26 年度報告書参照）。マウント部には撮影日時や被写体についての書き込みがなされている場合が多く、現秩序を保つためにも原板はマウントされたまま扱っていた。しかし、マウント仕様のままでは原板の平面性が保てず、現在取り組んでいる高精細な画像デジタル化を進めることが難しかった。

一方で、マウントされた原板の多くはカラーポジフィルムであり、経時での褪色が懸念されるため、速やかに高精細なデジタル化を進めるべきと考える。また、マウントされた原板にはビニール等でカバーされているものもあり、密閉された状態ではビネガーシンドロームの加速が懸念される。

そこで、マウントやカバーを取り外して原板をノンバッファ紙製包材へ入れ替え、さらにデジカメ撮影により高精細画像データとして残す方針に変更した。35 ミリ判フィルムについては、従来から使用しているスリーブフィルム用の蛇腹包材に収めたうえで、同素材の封筒に収める。マウント済みの 35 ミリ判フィルムは、1 コマ毎に切り離されているので、蛇腹包材の折り目に複数のピース（コマ）を収納すると、輸送時の振動でピース同士が重なったり、順序が入れ替わったりする懸念があった。折り目に 1 ピースだけ収納すればこのような懸念はないが、包材費用や保存スペースの点で不利となる。そこで、振動によるピースの移動や作業性を考慮して検討を重ねた結果、折り目に 35 ミリ判 1 コマのフィルムを最大 3 ピースまで入れることとした。1 ホルダーのコマ数が少ない場合には、折り目 1 つあたりの入数を 1 または 2 ピースに調整することも可能である。

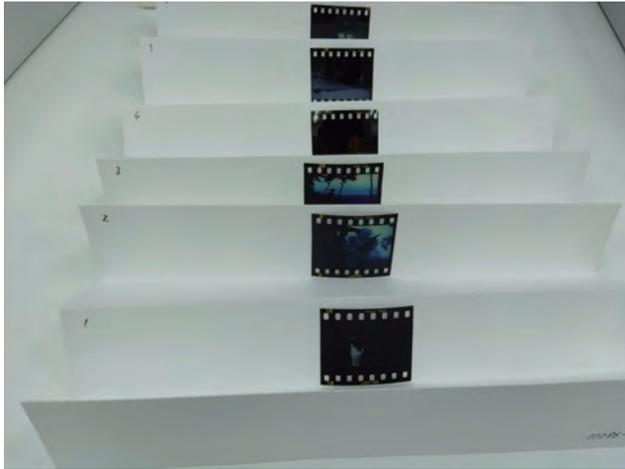


図 6.1 1ホルダーのコマ数が少ない場合の収納例

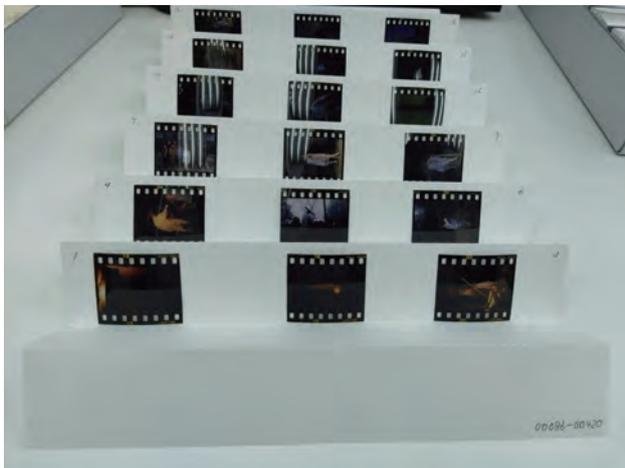


図 6.2 1ホルダーのコマ数が多い場合の収納例

日付や被写体情報等の書き込みがあるマウントについては、1ホルダーごとにスキャンを行い、画像データとして記録に残し、マウント自体は原則として廃棄することとした。取り外したマウントも保管するとなると、これまでの2倍以上保管スペースが必要になること、原板とマウントの紐づけが困難であることが理由である。ただし、資料群ごとにマウントに書き込まれた情報の量、識別のしやすさ、重要度などを勘案し、データの記録方法にはフレキシビリティを持たせている。すなわち、書き込みが少なく、文字情報のみである場合は、作業効率を鑑み、管理データベース上で「ホルダー表記内容」として入力するにとどめ、スキャン画像データとしては残さない選択肢も想定している。また、マウント自体が市販品とは異なる特別な仕様でフィルム種や時代の特定に役立つと判断される場合は、一部をサンプルとして保管することも検討する。



図 6.3 マウント書き込み情報のスキャン画像データ

【撮影年月日】		西暦 1988 年 月 日 31 ~ 西暦 年 月 日 31		<input type="checkbox"/> 推定 <input type="checkbox"/> 不明
【撮影場所】				
国	日本	地域	近畿	都道府県
詳細	比叡山の山内			<input type="checkbox"/> 推定
【詳細情報】				
資料種別	<input checked="" type="checkbox"/> 写真原板 <input type="checkbox"/> 写真原板以外	コマ数	10	
原板種別 1	<input type="checkbox"/> ナイトレイト <input type="checkbox"/> ガラス乾板	原板種別 2	<input checked="" type="checkbox"/> 撮影原板 <input type="checkbox"/> 複製	
原板種別 3	<input type="checkbox"/> 白黒 <input checked="" type="checkbox"/> カラー	原板種別 4	<input type="checkbox"/> ネガ <input checked="" type="checkbox"/> ポジ	
原板メーカー	<input checked="" type="checkbox"/> 富士フィルム <input checked="" type="checkbox"/> コダック <input type="checkbox"/> コニカ <input type="checkbox"/> アグファ <input type="checkbox"/> イルフォード <input type="checkbox"/> その他 <input type="checkbox"/> 不明	A-Dストリップ試験結果	0	
原板メーカー詳細				
原板サイズ区分 1	<input checked="" type="checkbox"/> 135 <input type="checkbox"/> 中判 <input type="checkbox"/> 大判 <input type="checkbox"/> その他	原板サイズ区分 2	<input type="checkbox"/> ハーフ判 <input checked="" type="checkbox"/> 35mm判 <input type="checkbox"/> 6×4.5判 <input type="checkbox"/> 6×6判 <input type="checkbox"/> 6×7判 <input type="checkbox"/> 6×8判 <input type="checkbox"/> 6×9判 <input type="checkbox"/> 名刺判 <input type="checkbox"/> 手札判 <input type="checkbox"/> キャビネ判 <input type="checkbox"/> 4×5判 <input type="checkbox"/> 5×7判 <input type="checkbox"/> 8×10判 <input type="checkbox"/> その他	
原板サイズ詳細				
原板記載情報	KODAK PKL 5002 RHP・218 PKR 5033 FUJI-RDP		ホルダー表記内容 (表)	ホルダー部分:1988 済 マウント部分:1988
ホルダー表記内容 (裏)				
ホルダー表記内容 (中)				
同封プリント有無	<input type="radio"/> 有 <input checked="" type="radio"/> 無		ホルダー同封物	
劣化状態	<input type="checkbox"/> 酢酸臭 <input type="checkbox"/> 粉析出 <input type="checkbox"/> 銀鏡 <input type="checkbox"/> 乳劑剥離 <input type="checkbox"/> 傷 <input type="checkbox"/> 破損 <input type="checkbox"/> 汚れ <input type="checkbox"/> 溶解 <input type="checkbox"/> カビ <input checked="" type="checkbox"/> 退色 <input type="checkbox"/> 変色 <input type="checkbox"/> カーリング・波打ち <input type="checkbox"/> ス테인 <input type="checkbox"/> その他 <input type="checkbox"/> なし			

図 6.4 管理データベースでのマウント書き込み情報入力

山下 博 (センター長)

7 情報発信と利活用

「日本写真保存センター」が収集、保存している写真原板はフィルムやガラス乾板であり、大正期から平成期に撮影されたものである。よって、このほとんどが50年以上経過し、保存状態が良くなかった原板はかなりの劣化が見られる。このような写真原板自体の保存方法について、これまで保存センターでは研究を重ね、セミナーやパンフレットなどで原板保存方法を発信してきた。撮影媒体はデジタル化が進み、フィルムを使用していた写真家の高齢化によって、残されているフィルム原板は今後減少してくることは間違いない。今後も保存センターでは貴重な記録である写真原板の保存の必要性と保存方法を継続して発信していくことが役割であると考えている。

一方、調査した写真原板はデジタルデータ化し、「写真原板データベース」（閲覧データベース）で公開している。保存センターが保存している原板の中には、太平洋戦争前から戦後の高度成長期の貴重な歴史の記録や人々の暮らし、風土、文化財、建築物、著名人など他で見られない貴重な画像が多くある。

これらの存在を広く知っていただき、見ていただく方々の知識や研究に役立て、時には出版物やテレビ番組でも利用いただき、より多くの人の目に留まるような活用を提案していく必要がある。

7.1 本年度の情報発信と利活用 総括

本年度の写真原板データベース（閲覧データベース）への追加コマ数は525コマで、累計で24,454コマとなった。新規公開では、岸田貢宜および林重男が原爆投下後の広島市街を撮影した写真を、広島平和記念資料館の協力を得て追加した。また、打田浩一が比叡山の千日回峰行を撮影したドキュメンタリー写真、勝山泰佑が著名人取材や戦後の日本社会全般を記録した写真を公開した。

ジャパンサーチとの連携、活用においては、令和3年度より利用開始した「ギャラリー」において様々なテーマで画像を紹介し、見て、知って、楽しんでいただいている。本年度は2件のテーマを追加し、通算では10件となった。保存センターが公開している他の画像にも興味を抱いていただき、更なる利活用につながることを期待している。

画像利用については、報道、テレビ番組、イベント展示、出版、学校関係など様々な分野からあった。今後の利用拡大や様々な用途に対応できるよう、デジタル画像作成の高精細化にも取り組んでいる。また、閲覧データベースで公開している画像の画質については、これまでは原板の撮影状態に準じてオーバーやアンダーなどそのままの状態に掲載していたが、より見やすい画像（濃度、コントラストなど）に補正する方針に昨年度から変更している。本年度も既公開画像の補正に取り組み、順次差し替えを行った。なお、権利関係の処理がクリアになっていない画像に関しては、原板情報は掲載しているが、画像は「No Image」として非公開にしている。

7.2 ウェブサイト

日本写真保存センターのウェブサイト (<https://www.photo-archive.jp/>) では、保存センターでの写真原板保存・アーカイブ化の取り組みを紹介するほか、閲覧データベースの更新情報や、報告書の掲載情報を発信するなど活動を行っている。

本年度は、2022年度より進めている写真原板の高精細デジタル化の取り組みを紹介する記事を掲載するとともに、「沿革」、「収集した代表作」、「リンク集」、「よくある質問」などのアップデートを実施した。

7.3 写真原板データベース（閲覧 DB）

7.3.1 本年度閲覧 DB に追加した原板情報

閲覧 DB に 525 コマの原板情報を追加し、公開原板数は合計 24,454 コマとなった。

追加した情報の詳細

撮影者・団体名	コマ数	掲載媒体タイトル
広島平和記念資料館	97	岸田貢宜撮影 1945 年 8 月 広島 林重男撮影 1945 年 10 月 広島
打田浩一	*1) 141	『光永覚道阿闍梨写真集 回峯行』 『比叡山千日回峰行 [光永圓道阿闍梨]』
勝山泰佑	*2) 287	『できごと』『ひとびと』
本年度新規公開	525	

* 1) このうち堂内で撮影された 45 コマは原板情報のみ公開

* 2) このうち肖像権に関わる 170 コマは原板情報のみ公開

7.3.2 閲覧数の推移

本年度の閲覧データベースの PV 数は 17,420 件、UU 数は 2,311 人であり（2024,4,1～2025,1,31）、月平均 PV 数 1,742 件、UU 数 231 人であった。昨年度の月平均 PV 数 1,445 件、UU 数 221 人（2023,4,1～2024,3,31）と比較して、月平均 PV 数は 121% と増加し、UU 数は 105% と微増した。今後も閲覧数を増やすために、ジャパンサーチのギャラリーを作成し、その時々話題性のあるような写真を掲載していく。

山下 博（センター長）

7.4 ジャパンサーチとの連携

本年度も引き続きジャパンサーチとの連携を行った。

本年度も、ジャパンサーチの「ギャラリー」機能を使用して、サイト内で日本写真保存センターが公開している画像の一部をテーマ毎にまとめて紹介するページを作成した。

本年度作成したギャラリー

・渡辺 義雄と帝国ホテル

帝国ホテル 2 代目本館（通称「ライト館」）を渡辺が解体前に撮影した。惜しまれつつも解体され一部の部材を使って現在は博物館明治村に中央玄関が「様式保存」の手法で再現されている。しかし、食堂の柱など一部の部材を残し大半は失われてしまった。現存しないメインダイニング、宴会場「ピーコックルーム」や、フランク・ロイド・ライトがこだわった装飾のディテールを克明に記録した渡辺義雄の写真をお楽しみいただきたい。

<https://jpsearch.go.jp/gallery/photoarchive-6g3l9dlqYkZ>

・東京駅の変遷をたどる

時代と共に移り変わる東京駅の光景を満蒙開拓から戦後の高度成長期にわたって順番に紹介した。撮影された当時の社会情勢が色濃く映し出されている。

<https://jpsearch.go.jp/gallery/photoarchive-v1MXEmKEYQJ>

寺師 太郎（公益社団法人日本写真家協会理事）

7.5 セミナー

保存センター委員会は、日本写真保存センターの存在やその業務内容、センターが行う写真原板保存の具体例、写真原板のデジタル化方法、これらで発生する諸課題への取り組みを当協会会員はじめ広く世間一般に周知する目的で、セミナーを本年度は2回開催した。

●令和6年度第1回セミナー

過去のセミナーで得たアンケート結果から、フィルムをデジタルカメラで複写する際の作業手順やフィルム原板そのものの保管法に関心が高かったことを受け、保存センターでの原板デジタル化業務内容とそれら手順を具体的に示す実践的なセミナーとした。

名称：『後世に伝えるフィルムデジタイズとフィルム保存』

日時：令和6年10月11日（金）14:00～16:00

会場：千代田区一番町 JCII ビル 6F とオンライン配信（JPS 会員限定）の併催

主催：公益社団法人 日本写真家協会（JPS）、保存センター委員会

会費：JPS 会員は無料、非会員は ¥500-（税込み）

プログラム

- ① 挨拶・保存センター事業案内：寺師 JPS 理事 / 写真保存センター委員会担当（進行役）
- ② デジタルカメラで行うフィルム画像のデジタル化、その手順やメリット：野田補助員
- ③ 高画質、高品質なデジタルデータ作成に向けたピクセルシフト撮影など最新技術の検証：野田補助員
- ④ デジタル化した画像データの観賞用最適化へのレタッチ実演：野田補助員
- ⑤ 中性紙を使ったフィルム原板の保存手順、そのメリットについて：高村 JPS 副会長 / 保存センター代表
- ⑥ 質疑応答
- ⑦ 閉会挨拶：高村副会長

参加者数

当協会会員への告知を開催1か月ほど前より行い、10日前にはWEB媒体を通して一般からの参加者を広く募ったところ、JPS 会員 22 名、非会員 27 名の来場者と、当協会会員限定のオンライン参加 30 名の計 79 名へのセミナーとなった。

来場者アンケート結果

開催後に来場者全員へアンケート用紙を配布し、回収できた45名分の結果を記す。

- セミナー情報取得先：JPSのHPやメールから48%、各メディアから30%、
他団体等から18%（複数回答も有）
- 本セミナーの満足度：4.4点（5点満点の平均値 以下同じ）
- 内容の分かりやすさ：4.4点
- 進行のスピードの満足度：4.5点
- スタッフ対応への満足度：4.8点
- 参加費用への満足度：4.8点

記述回答の中の「センターでの手法が良くわかりました。自分でどうするか、検討する参考にさせていただきます。」「フィルムが白飛びしていてもデジタル化で色彩がよみがえるエピソード（に興味をひかれた※筆者加筆）。」などの反応から、セミナーで具体的手法を紹介することによって、同じ課題を有する対象者に即効性のある提示ができたと考えている。また「モニターが見にくい」「画面の文字が小さすぎて見えない もっとプレゼンの準備をお願いします。」など会場での表示方法等への指摘もあった。



第1回セミナー会場の様子（撮影：竹田武史）

●令和6年度第2回セミナー

歴史を写したフィルム原板をデジタル化し、閲覧に適した画像に仕上げる際のレタッチ作業で配慮すべき事例や、それら画像の公開時に懸念される法律上、倫理上での課題をテーマとし、写真家協会の著作権委員会担当理事を交えてフィルム原板公開時の写真著作権に関する課題等を取り上げた。

名称：そのレタッチ大丈夫？～歴史を捉えた写真仕上げと公表時の法と倫理

日時：令和7年2月12日（水）14:30～16:00

会場：千代田区一番町JCIIビル6Fとオンライン配信（JPS会員限定）の併催

主催：公益社団法人日本写真家協会（JPS）、保存センター委員会

会費：JPS会員は無料、非会員は¥500-（税込み）

プログラム

- ① 挨拶・保存センター事業案内：寺師 JPS 理事 / 写真保存センター委員会担当（進行役）
- ② フィルム原板のデジタル化と画像仕上げ（レタッチ）手順：野田補助員
- ③ セッション：野田補助員、寺師 JPS 理事、吉川 JPS 理事 / 著作権委員会担当
 - ・ デジタル化した写真の著作権を考える
 - ・ 著作者人格権が及ぶ範囲とは？
 - ・ 歴史の記録か残虐写真か
 - ・ 日本文化か猥雑か
 - ・ JPS と著作権と日本写真保存センター
- ④ 著作権諸問題：吉川 JPS 理事
 - ・ 銀塩写真をデジタル時代に使用するには何に注意すべきなのか？
- ⑤ 質疑応答
- ⑥ 閉会挨拶：高村副会長

参加人数

当協会会員への告知を開催3週間ほど前より行い、2週間前にWEB媒体を通して一般からの参加者を募ったところ、JPS 会員14名、非会員17名の来場者と、会員限定のオンライン参加24名の計55名へのセミナーとなった。

来場者アンケート結果

開催後に来場者全員へアンケート用紙を配布し、回収できた45名分の結果を記す。

○セミナー情報取得先：JPSのHPやメールから48%、各メディアから10%、
他団体等から10%（無回答も有）

○本セミナーの満足度：4.3点（5点満点の平均値 以下同じ）

○内容の分かりやすさ：4点

○進行のスピードの満足度：4.6点

○スタッフ対応への満足度：4.8点

○参加費用への満足度：4点

記述回答では「前回のセミナーにも参加させて頂き、さらにその先の手順や権利に関して伺うことができ、ありがたい機会でした」「写真の保存方法を知りたかったので参考になりました」「旧著作権法で1958年以前はパブリック・ドメインに基本的にはなっているということ、聞いて本当に良かったです」「著作権・肖像権に関することはぜひ定期的に伺いたいです」などのご感想を頂き、アンケート結果からは写真原板の保存に関する情報提供の重要性、画像公開に際しての権利関係処理に課題が多いことが分かった。

これらの課題を持つ団体・企業・写真家に対し、具体的な施策や、その社会的・文化的意義を繰り返し発信し続けることは、写真文化の継承に寄与すると考える。



第2回セミナー会場の様子（撮影：内堀タケシ）

井上 六郎（補助員）

7.6 画像貸出し等の利活用

画像貸出しに関しては、松重美人（中国新聞社）、片山攝三、渡辺義雄などが撮影した写真の利用希望が、放送局、出版社、イベント企画会社、公共団体、博物館などからあった。

利用目的は、テレビ番組、写真展やイベントでの掲示、書籍や教育教材、図録への掲載など多岐に渡る。本年度も松重美人（中国新聞社）の広島原爆投下直後の画像の利用が多かった。

本年度の貸出し用途の詳細、年度ごとの貸出し件数の推移は以下の通り。

< 2024年度 写真貸出し実績 >

- ・ 高校入試問題集（社会科）
- ・ 神奈川県立図書館改修工事記録写真集
- ・ アーティスト 楽曲紹介 Web でのイメージ画像
- ・ NHK 放送大学教材
- ・ 世田谷区新庁舎内前川ギャラリーでの掲示
- ・ 筑摩書房「天皇たちの寺社戦略」のカバー
- ・ 正進社 中学生ワークブック（再使用）
- ・ 私企業の技術館でモニター放映
- ・ みすず書房「未完の建築 前川國男論・戦後編」の本文とカバー
- ・ テレビ朝日「サンドウィッチマン&芦田愛菜の博士ちゃん」
- ・ 森林総合研究所講演会資料
- ・ 展覧会「ハニワと土偶の近代展」図録
- ・ NHK 新日本風土記「東京モダン銀座界わい」（再放送）
- ・ 港の人「谷崎禮讃 谷崎潤一郎をめぐる人々との出会い」
- ・ たばこと塩の博物館「昭和30年代の暮らし」展示パネル、図録
- ・ 産業遺産情報センターでの展示動画
- ・ NHK クローズアップ現代「被爆者・坪井直さん～未来に遺したメッセージ～」（再放送）

- ・NHK「あの人に会いたい 坪井直」(再放送)
 - ・画家 絵画を描くための風景写真
 - ・NHK BS ドキュメンタリー番組
 - ・NHK「アナザーストーリーズ」(再放送)
 - ・NHK「高校生平和大使」
 - ・NTT インターコミュニケーションセンターで上映「国宝へようこそ 8K」(再使用)
 - ・NHK「あの人に会いたい 田名網敬一」
- 以上 24 件 (2025 年 1 月末現在)

<年度ごとの貸出し件数推移> 2024 年度は 2025 年 1 月末時点



山下 博 (センター長)

8 支援組織

日本写真保存センターは、2006年に設立発起人会を開催して、「日本写真保存センター設立推進連盟」を設立したところから始まった。代表には森山眞弓、副代表に田沼武能が就任して文化庁に「設立要望書」を提出した。2007年には文化庁は「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」を委嘱事業として予算化し（約900万円）、日本写真家協会が受託した。その後より活動が本格化し、フランス・イギリス・アメリカ等のフィルム保存している施設調査も実施した。

2011年から「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」（約1,800万円に増額）に発展し、収集・保存調査の他にアーカイブ構築に関する調査にも着手した。保存調査を終えた写真原板は、2012年には文化庁から貸与を受けた東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館（現「国立映画アーカイブ相模原分館」）に収蔵できることになった。

そして2014年1月に写真原板の調査研究をサポートする支援団体の組織を立ち上げ、支援組織も2024年度で12年目に入った。

支援組織の設立から現在までの経過と現状について報告する。

8.1 支援組織設立の経緯と支援組織会員

保存センターの本格的な活動が始まり、取り扱う写真原板の数量が増加するにつれ、調査活動に必要な要員や資金が拡大していった。文化庁から事業費が出ているが、これだけでは調査活動に限界が生じてきた。そこで、「日本写真保存センターの事業活動に賛同して活動を支援いただくための組織」を立ち上げるため、公益社団法人日本写真家協会とキヤノン株式会社、株式会社ニコン、富士フィルム株式会社の4者が支援組織の役割や支援内容をまとめ、日本写真家協会の賛助会社を対象に支援組織会員への参加を呼びかけた。

結果、賛助会社は写真や印刷に関連する企業が多く、写真原板の保存や利用に関する意義の理解が得られやすかったため、初年度となる2014年1月には12社が会員となり支援組織が立ち上がった。

2024年度では11社1団体の12会員に支援いただいている。

・支援組織会員（2025年3月時点 11社・1団体の12会員）

株式会社アイデム

エプソン販売株式会社

株式会社キタムラ

キヤノン株式会社

株式会社シグマ

株式会社写真弘社

株式会社タムロン

TOPPAN株式会社

株式会社ニコン

一般社団法人日本写真著作権協会

富士フィルムイメージングシステムズ株式会社

株式会社フレームマン

（50音順）

8.2 支援組織の沿革

- 2013年06月 支援組織準備の3社（キヤノン、ニコン、富士フイルム）と協議会
- 2014年01月 支援組織立ち上げ及び保存センター実務責任者をキヤノンから派遣
- 2014年05月 公益社団法人日本写真家協会の賛助会員に説明会実施
- 2014年10月 支援組織会社12社による初の「支援組織会議」を開催
- 2015年04月 支援組織が14会員となる（1社・1団体増）
- 2015年08月 「原爆展」（展示：JCI フォトサロン）に支援会社が協賛
- 2016年04月 支援組織が13会員となる（1社減）
- 2016年11月 「渡辺義雄展」（展示：ポートレートギャラリー）に支援会社が協賛
- 2017年03月 保存センター実務責任者が支援会社のニコンから着任し責任者交代
- 2017年06月 「東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館」見学会
支援会社3社（キヤノン、ニコン、富士フイルム）から計10名が参加
- 2018年03月 「後世に遺したい写真」（展示：みなとみらいギャラリー）に支援団体が協賛。4日間の写真展開催に約7,000名が来場
- 2018年06月 「国立映画アーカイブ・相模原分館（2018年4月に独立）」見学会
支援会社4社（凸版印刷株式会社、オリンパス株式会社、株式会社写真弘社、株式会社キタムラ）と文化庁から計10名が参加
- 2018年10月 「後世に遺したい写真」写真展・講演会（光村グラフィック・ギャラリー）
10月25日～11月24日の開催期間中1,100名が来場
- 2019年01月 「日本写真保存センター作業分室」を日本写真著作権協会の支援により
台東区台東に開設
- 2020年03月 保存センター実務責任者が支援会社の富士フイルムから着任し交代
- 2021年04月 支援組織が12会員となる（1社減）
- 2022年10月 「日本写真保存センター作業分室」を千代田区神田紺屋町に移転
- 2023年04月 保存センター実務責任者が支援会社の富士フイルムから日本写真家協会が採用する
管理者（センター長）に交代

8.3 支援組織の支援内容について

支援組織からは毎年会費として支援をいただいている。具体的には調査作業室の整備、調査員の人件費や活動費、原板の長期保存のための包材費、備品調達などの費用の一部に充当している。また、日本写真保存センターの活動を広報するためのセミナーや講演会などの活動費にも使用している。

これまで、日本写真保存センターの実務責任者は支援組織のキヤノン、ニコン、富士フイルムより3年ごとに交代で要員の支援を受けてきたが、2023年4月以降は日本写真家協会が採用する管理者（センター長）を置くこととした。

また、2022年10月より作業事務所を千代田区神田紺屋町に移転。日本写真著作権協会より引き続き賃料の一部を支援していただいている。

8.4 今後の支援体制と保存センターの活動について

ウクライナやパレスチナでの紛争など不透明な世界情勢の中で、原材料費・輸送費などの物価高騰も続いており、支援組織の会員企業にも少なからず影響があったと考える。こうした状況下において、

本年度も変わらず「日本写真保存センター」の活動にこれまでどおり賛同いただき、支援を継続いただいたことに感謝申し上げる。

原板画像のデジタル化においては、今後の利活用を見据えて、高精細な画像データの作成を進めている。撮影機材（カメラ・レンズ）については、支援組織会員より無償貸与いただいております、重ねて感謝申し上げます。

保存センターがこれまで収集した未調査および調査中の写真原板の中にも、まだまだ歴史的・文化的に貴重な画像が多数存在している。劣化の危機に瀕している価値ある写真原板を少しでも早く、少しでも多く調査し、国立映画アーカイブ相模原分館での恒久的な保存を図っていかねばならない。本年度は、写真原板の劣化状況を踏まえて資料群ごとに優先度をつけて調査を実施し、利活用が難しい資料群についてはデジタル化を先送りして相模原分館への入庫を優先するなど、資料群ごとに内容を見きわめて対応方針にメリハリをつけて作業を実施した。写真撮影の主流がフィルムカメラからデジタルカメラへ移行して既に25年が経過し、フィルムカメラで撮影に取り組んだ写真家の高齢化が進み、貴重な瞬間を写したフィルムの散逸が懸念される。調査作業の効率化を進めるとともに、調査や保存方法にフレキシビリティを持たせることで、限られた人員や予算の中で持続可能な体制を築いていきたい。

支援会費や文化庁からの委託事業費を有効に使うべく、様々な経費の削減や見直しを引き続き進めている。保存センターの活動意義に賛同いただける新たな支援会員や機材提供をお願いできる企業の獲得にもさらに努力したい。また、寄付の募集の仕方も引き続き検討し、今後も安定した業務遂行ができる体制を作っていく。

山下 博（センター長）

9 まとめ

令和6年度、日本写真保存センターでは公益活動に力をいれるべく、シンポジウムへの参加と2回のセミナー開催を行った。6月のアート・ドキュメンテーション学会年次大会においては、「写真文化の継承と資料・記録の保存活用」をテーマとしたシンポジウムで、写真原板の重要性について発表した。10月には、「後世に伝えるフィルムデジタイズとフィルム保存」と題し、フィルムをデジタルカメラで複写する手法を紹介。参加者は70名を超え好評であった。令和7年2月には、「そのレタッチ大丈夫?～歴史を捉えた写真仕上げと公表時の法と倫理～」と題し、著作権に関する話題を取り上げた。

写真原板の収集に関しては、本年度も十数件の問い合わせがあった。収集調査にも何度か赴いたが、権利関係が不明確であるケース、写真展や出版物で発表された写真と原板との紐づけがされていないケースなど、収集する原板の調査に多大な工数を要し、結果的に収集を断念することもあった。写真原板がある程度整理されていないと収集が難しいという課題は諮問委員会でも共有し、写真家自身や遺族への啓蒙活動、廃棄されてしまう原板を一時的に保管しておくスペースの確保など、活発な議論が行われた。

毎月定例の写真保存センター委員会でも、原板収集数とアーカイブ作業工数のバランスや保管場所についての議論を行い、課題解決に向けた中期的な視点での施策検討を進めている。今後のセミナーの企画では、貴重な写真原板の散逸を防ぐため、写真家自身に推奨する原板の整理方法や適切な保存方法の紹介にも取り組んでいく。

昨年度に引き続き、広島平和記念資料館からは原爆関係ネガ41コマの追加の保存要請があり、国立映画アーカイブ相模原分館へ保存管理した。本年度までに資料館が保有する原爆被災後の写真原板168コマの委託を受け保存している。原爆投下後80年の節目となる令和7年8月には、写真原板の保存意義と原爆写真による被爆の記録継承をテーマとした写真展を企画している。

今後の課題としては、写真保存センター人材の育成、早急なフィルムの発掘、収集及び資料としてのプリントの保管場所の確保及びデジタル化のワークフローを整備するスペースの確保、Webサイト刷新を図り保存事業が広く社会に理解され開かれた存在となるよう努力を傾けていきたい。

高村 達（公益社団法人日本写真家協会副会長・日本写真保存センター代表）

禁無断転載

令和6年度 文化庁
「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」
報告書

令和7年3月 公益社団法人日本写真家協会
〒102-0082 東京都千代田区一番町 25番地 JCIIビル 303
TEL : 03-3265-7451 FAX : 03-3265-7460
<https://www.jps.gr.jp>
E-mail : info@jps.gr.jp